あそしろ錦

全

へ 5
5584

南越遊系庵

碑面

醉うて寐ん撫子
咲ける石乃うへ

芭蕉翁

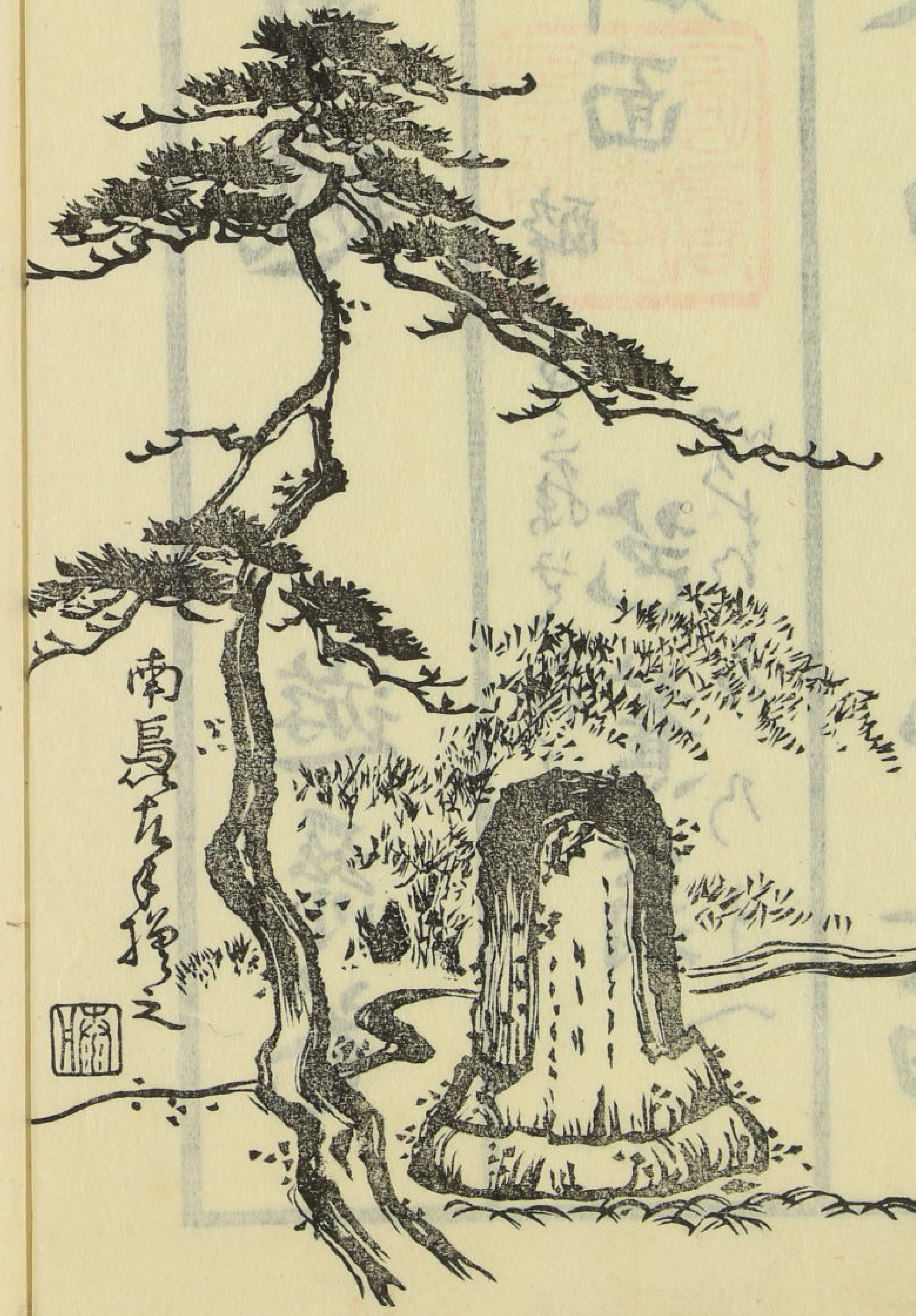
勝山巴文編

內 へ 5
號 5584
巻

38- 7245

石碑供養序

因を縁より川くもくを縁と哀めさる小し難る
なんそこに花堂好古乃社中 俳諧の墳墓
何らやまほしその志彩まさる乃事なりしか
是因縁の動くほしく皆寄りはとし 俳諧に
あとしい志ありは素信代英んと云ひ古人らく
事代はしくみ流 深つ縁にみつからあり
伯立院乃境内に霊地とえらひ碑石を建
と見く祈しも墨書し乃金式の後その功
終るすといふりぬ 柳壮子伯立院出現劉
百こを示も及つ成よし 中以本号の史録に依て



院号免許を蒙りて既に一旦無住乃空院
となりしを忍ひかねける故発起して修復
再興如常にしたる恵心僧都乃刻ませ給ふ
霊像なれはかしこくも都にて貴賤諸人乃
崇敬浅からす殊に此院は殊勝なる所なり
古来乃縁起に見えたる濫觴縁合の画説と
あれは仏祖乃修行に自ら後代の為
行ありける一念の称名機縁を以て寂に
来縁起の霊験をも世に顕はしむと
なりし寺乃本尊霊異を納めん事を生せし
何ぞ当寺に於ひては社中の面目を以て
院に縁を付けて如来と申すへき所也

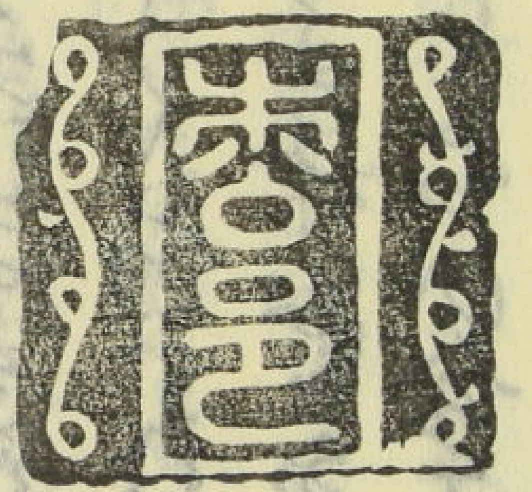
そもそも此地は古へより名所にて民屋を隔てゝ見たれは
昔乃風光さなからにして多女乃山岳眼界
に見ゆるもち白根か嶽乃天嶺も東窓の隔に
楼閣し九頭竜の大河も南北をとくなかれ
猶此界に出て天下も見わたしてそれ
四序乃風流なられは春さく花夏も
あしあくり百草千鳥にして秋すみ河なと
寺鏡の風中に縦ひあれは終の女乃雨
に至るまて書家清くして京都の笠乃端に
りく海に野なるもありて也
夜あけての暁の中
撫はてらしまて耳にもすむ

堂廻八ッ一間も所さりなく堂を守りてけふよりも彼
仏におもひを寄せ参る事侍らひ朝ごとに八座の堂男
女老若をえらみ祓除の供を捧げて肌をあらはして
まゐりくるひかんやむともに月ことにかはりくて
大師山の頂より紙の中にて入るかぎりもおはす
かしこくたもと備へたるあるやみそなはす人目に
かれはさに葬しける墓れたりけるにまるものを
小嶽乃神さえてあく行ふに光よりて廬の続
くる事し風雅によりくてよゐを許ふ寺乃僧ども
年にこれは葬むくしとも仏をの比えはさく
志ける色も堀に蔭わたりて竹林のもとなりを
うへ経に雲居ひとつ衣流をて川をみてもえのく

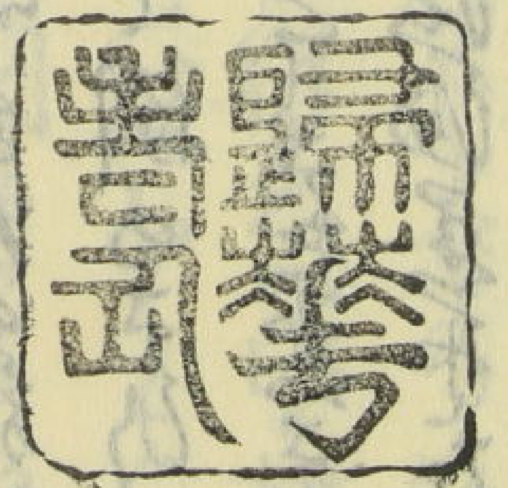
明るゆかりかむかしの家名侍まらんの雑伝あるも
覚えて座しくはなれてそこに例のさたしける
例乃ならひ秘に神霊あらはれてさをもいさんや
又かは清くしむひ合すれは法海里へかなれ
須臾に居を去まり乃樹苗流へも清をし
折にふれ居のそうをきをし給へる阿弥陀
極楽の詠りしかば佛やせ塚乃霊とし当時を
祖母乃法悲に冥合して周縁観念殊の
霊場とし加へし志つ八十余石のゆかりに
推すに堀を仏光といへるに仰せまちもつ所徳に
まゐりくるもの多く尼も此寺に其由聞ゆる
多かりし寺にして従来乃縁をまた施経まも

侍くん年々之趣て東山居のとゝ発起廣蘭亮謹泥りゝ
永く此花乃風雅此後しにまへうし也
霊前に茶献跡をよそほひのえらり

寛政十一庚申歳三月



帰蓼仙謹書



五十韻

眺めやりぬ都あらし亀塚乃月　巴文
閑に縁と乃附和顔雲　自清
喰ひふてしと公事もおさめて　敬止
此しく江比しきて　知鮮
何もかもみかりの那しの乃まゆり店　烏旭
口和よ言白おのれさやか　渭流

夜川のともしもちらちら引仕廻　雨林

きとへうちてもうらと弦音を　芝錦

流鱼しき龍てみえく中の弦音のと　芝青

せ川らく脇を破らさめけり　南溪

麻附かもるて雲あの乏しかり　圓之

帰つ道花もらくるつまれ　柳浦

此りし北古の客子も連歌にも　露憲

お伊勢さまへと向く遠縁　三行

意地入乃如果しふお祝ひ　竪貫

踊子のこりの口よりたくうり　正軽

後も知ふ思ひ添ひてる重ね月　南鳥

たえふ萱の子の稲に作りしを　其鳥

譜まらふそひとも琵琶法師　柳左

古ぞて見えかりし乃霜切　宜調

されハそて人のこころ咲くらま　砂流

夢ふうちまひも白菊の世差　一瓢

二オ

永き日も富士や火縄しりよかり　兕十二

三條四条出かく雲京　照水

晴よふ来てもむかし戻るかれは　梅里

野は笛めぐる紙くとくる足　等佐

十ねそと仏壇乃戸と寒さかな　笑計

次もまとうろうに家移　讓畝

黄ひ茶飲みし猫ね糸引く足　有李

大宮さして出る北風妙無當　風架

ちろくと急ぎ明ぎり光りけり　賤扇

後朝の川岸のこえ流れつゝ　可樂

浪良乃湯も湯し並く古女房　緑水

松の位乃わらしを廓出　寄梅

楊枝も買つく志州かな落目ね　琴二

語る男を紙さ母さまよく　野翠

二ウ

むすめ糸しまと嫁の渦り酒　蜷水

安房乃上総にて家並てる　嵐顧

萬めの名川ミ示蒙るまして　草杣
手川と利くし併祕咒ひ　可笑
乞く為本を古甫江寸なるく　窓雨
奥ゝるんゝ述く伊縁叢戯　踏遊
阿ら八ホきミ反悟氣ゝおとろへ　柳蛍
御用ゝつゐ工阿さま搖く　三志
おすゝれ嵐エ消く冬の月　巴陵
姆さくつゝりし小窓もすご　千巵

優长ふ生役浅皆よ寒ゝ絶く　坂左
天日出んゑゐゝく市乃云傳　草遊
当年乃願ゐ館もむ乃江　蛙敬
色もぬ旡ぬ絶善の廿日　可瑞

借出江冬詠

時雨りふゐ外ゝくこゝし寛政中の春

伯立精舎乃写経ハ其事ニ於て一段乃
信を起し古代を慕ひ原経にも近く
祖師様の塚ともいふべし筆者ハ先ツ
徳出れバなり是乃寸志とも云ふべし
乃ち今も古の地に此堂の永く残る事
きは此の所に於て新たに其事業ハ
爲も然り空に雲晴れ世の中も廣く
実に尊き事なり是を見ゆるに神霊の
感應有りしかりしとこれ乃く禮
ぞし筆者記之

沙門

首ふも徳や今ゆく秋の月ニて　滄浪舎　敬止

尽くしてに菫むすぶ乃秋代　露恵

うちとれハや供養塚供書　三志

仝　武門

蝶も来る深く輝やその供書　投筆舎　砂流

清見あらそ秋や塚ニ其の面　杏吹庵　琴二

寛かに恵方へ輝乃香り　四時園　巴陵

尽きて枝葉や塚ニ其供書　樂只菴　一瓢

花となる徳や百年経てもなを盛　岸梅亭 宜調
若みどり柳桜や墓ちかし　理成菴 寄梅
尚まさふ徳仰ぎぬ塚詣　有李
塚に仰ぐ春の恩や代々に松　風架
朝塚や清めく晴て宮浅し　笑計
文庵の徳を称へし塚の草　可樂
村ふまでやむかしよりの塚詣　嵐顧
光まもとや照らん祥乃光り　攘畝

恩なりに涙やなかりし塚於跡　可笑
新向も庵し出口乃茶くもり　坂左
朝ふと法乃光りや塚乃春日和　千卮
紀くその恩ある徳香る塚詣　草遊
立川や拝も寒月永ふ口の新ひ　緑水
嬉しさに蝶や手向乃花乃数　草孤
営や仕書乃継きし時ふ春川め　櫻菴 戦扇
下露もかふ梅子乃塚於跡　蛙敬

塚迄川や世に哀乃花ざかり　町家　南鳥

作く塚乃まで聳しむの雲　免涼

暮し居も殿ぬ禅乃さかり　柳左

塚は風情見ふや此の月影の衣　圓之

去年も自然ゝ冬乃塚供書　湑流

行ふ作くまてや塚の花供書　翠二

塚さへ清し声すゝむの音　烏旭

亮も乞ま碑をかゝむ塚供書　柳浦

石樹く作者の為し居乃哀　可瑞

去年代柳ぬさし入乃塚哉し　芝青

先ゟ川ん泥やさとめて百千鳥　雨林

代く伴ふ詣りや塚と石の松　羽白

旅寄ふや衣かさ去の塚供書　其鳥

管も塚ふ手まふや手向とも　三行

聳しき居も手ひくや塚供書　正輕

名しらむ石碑て昔も茅さ枕附　南溪

むまるは栄つんだ乃業乃塚　知鮮

身の終も供養爲しや塚まぞ　等佐

代々たへし塚は涙れ以徳の露　柳螢

あら塚や芝も花さく落き露　窓雨

云ひし言や塚乃草のむ　路遊

塚もちく咲くやんむの香供養　盲人 芦吹

塚のきよ見助けるも石は縁のむ　尼 自支

永く例しや永きに塚が跡　以貫

定まる世塚乃主ともや不可思議乃因縁あるに文化和にしも孝て行して
おくの酒猪とも知ー年ん石乃
足かくせるやと謹く育禄く揃ひ

當院看住尼

秋おりさ続く五体塚乃あらしかな　自清

諸方文通

元の香も伝ふや塚乃跡正へ　在若猪野岩舎郡上 宣遊

永ふにも営く偲し碑の供養　若猪野 鈴呂

色も増して見ゆるや松の塚まはり　井野口 路三

露や消ゆ印の氣も澄むる声　堂島 池月

空からも降ると塚乃花供養　萩野 照水

仰し行く栞やいさ知れ去る日和　仝 梅里

原おかし乃もみぢ葉まこの手向　麻生嶋 蜷水

行ふまてふ託ちてに栞乃寄り　仝 野翠

むかしに行くん乃塚半代　宍馬朝日 以道

陽炎も祝ひときてふ塚供養　布仙

行き会ふや代々も露色乃徳　仝市布 一蹄

尋ね行く姿や塚頭信乃花　新保 和分

下りえもみて夕寿番や蓑河より　福井 二専

向ふ氣も尚し塚の翁かな　府中 芝錦

翌日條真

四十四行

体むかまるもいつこま甚乃雨　敬止

笑ふてもしと云ふきゝ山　柳左

ゆる日乃一筵にと笑声に来られく　雨林

ちよう川と一すぢたのむかころひ　芝青

流しとを話しれ猪ちやすしやり　南鳥

咲くかゝ川さゝまとし紗帳の　円之

打つまつく麻緒て皇乃月　以賀

赤れもさる乃紋も月になる　烏旭

右八句表左畧

孤木公臺先君遺章

祖翁百回忌霄晨手向

代〻に汚れをしへや月の矢の下

梢をもとゝの扇子ぞるやせの末も

春秋一百韻巻頭

雲をもしれ雲ともりてや山桜

右巻五十韻発句

名月やつきとたえられ縫へ雲

右月五十韻発句

嬉しく乃ちつまて花ふや野てし日和

汀出しる手漕ぐ人あふふま飛すとこ

康乃ともや月照る松末の稲あられ

冬枯や人ねさ小屋乃ほとこ豆

右入集四季吟

百回忌手向

嘆徳表

遊絲菴

誹諧乃滑稽の正代ゆへ本朝ニ俳諧の一門を建立しよく正風乃宗祖と仰れたまふ芭蕉居乃風羅坊あるじは素性を伊賀乃上野にして居堂家の仕官をまちに桃地党乃松尾氏之をいやしふ国禄ふや無常迅速のことひからをさとりて是よりくまつと辞しくのみ俳風にの教をつとめ人俳諧乃道ニ趣きまつくなりて佛頂乃元照奥をとひくり自利ゑ他乃宗修道ぶ飛ろくやかげてく風雅俗学ひのつゝと悟す山村の二季寄を師とて和歌

連哥乃俳諧ハ是もそれ古歌のてにをはを
うちくづしたらん戯言を世乃情を乃譲をき
ここに武蔵の深川に隠遁せしに六乃年を
せんかこの古池乃蛙の音に天地の化を感悟して
點化して自得あるより桃青の名ハ世に高くは
然るに正風に入るといへども執六種雲散の光を被り
高きも名誉を世に弘めより芭蕉の世を分れ始まさ
俳つとめこれを用ひて称し其てんやをハ芭蕉と渾円り
翁となりて其れより志されハ高く又も猶さも其の和を
形つさこれ風々でひきてく世の道をく伊賀をさる
あはれ蕉翁の高きよりて高位貴顕の席に
交りたる人へも大宗出世の友にかたらひ後の

風交ハいふ白かりしも野をうつ人のなげき神つき
うさ乾坤無任乃瓢毎をもちひ東漂西泊をたびく
あまねり小川の吉野の桜中に出て富士の裾をの梢まで
くまなる事の不易流行乃雨よい西施乃合歓宮乃艶羽小
島しげり風を新しく其の所ハ実に紙後世まで残さ
記しこれ事にまぎれこそ不能られくわしくそれハ紀行篇
西国の旅立をとおもふよりくもりてくれ終に无行にいたり
このとき川々にありても亦も終りを遂げ浪花の旅宿にて遷化す
周防して大凡其年より招致あると古き孔門十哲の
徳あるをとるんも此世に没後百余歳の今に至りをかくさ
称く然も吾妻乃果のはてまでも其の道の教を受くる人を
出来るを数ふ也ひたすらとうくる事無窮のむかしよ

百信すといふも是よし財積乃自然にして天より
志らしむ所にしもあらと世の信乃源ふかし
時移りそれぞれの志をすゝめ至く浦々の
志をも悦も班々競例乃をひろむる勇業や
宗に施のみと正統宗師乃額命にして洛の
乃業の風土何くにか及ひ行かし京洛の双林寺
ふしある追福雅筵乃大会をなし翁忌の
とゝのへ催して伝え継しゝ會にて大き
その例よ各別乃真似あらん八百經し芭蕉堂
乃社中志を同ふして滄浪拜命法席を
設けて倍蕉法楽乃終事を営む東向の各
嘴まて經成就して拈香終しまり連社

正韻乃吟真よ当霊照見らんを流ひさ
嘆徳の格調をつらね滄海一滴乃蕉志に
擬とれるなり

寛政五癸丑暦

十月 日

百韻 表十句左畧 巴文

清風の[illegible]光世の寂[illegible]

好ふ然[illegible]百とせ乃春ふ 兎涼

建添え乃あの宵世間も桂雫ふて　敬止

入れも法おほらぬ吉のまゝ里　烏旭

掛手拭くう人自然ほたれてを　芝青

雨傘しかう抱くらん　宣　以貫

上弦も二日三日を何りやれし　南鳥

手ぬふもまゝ手ゐ御所の薮入　児十二

枝され名乃菓を何のてんきんも　柳左

うら町ふく店の小まゝ簾　雨林

同題吟

南越勝山ある於京居一書堂社中
風雅を温め紅恩に深く謝せんと
浅からぬ志を述さんと乞ふし
やつれ行身は縦組乃綱文もめく
与えんと書く手伝情深くしるす
写加あう年月暮乃
籠ふ為移すは　白寿坊

右は祖師翁乃百四季を編集乃企ありて漸く
梓にのほせむとせし折から坂城蟾渡乃
公務繁忙さ世の中のよろつの事業に附きて
頻りにいそかはしく其編ある句の撰集ならさ
りしも首尾なひて既に宗匠家乃家号をゆつり
乃ひとく絶倒ありしはおしむへしそれより二世を還る
事とそなりて如夜鑽を更にして不倒ありしに深窓に亡ミ
節しるしに於いて本誌を快復あらむとせしかとも
遊去しるひとのはに編集せむに深きものより
こゝに其乃遺稿を採て世に公にする趣を
あはせしるすのみなり

附録

四季混雑

松談菴先生　雨琴翁

永き日や暇にて丘を渡りけり

故人　旅泊坊

彩色のなりて山や初しくれ

仝　左静坊

名月やそれゆゑにこそ海の果

仝　東枝仙

植さかる風の流れ有る乙女かな

右は先生が社中遺稿の中より抜出して記しおくもの也
しかもまた余とも思ひそんじての事と記し

諸国名録

兀として入り日寒し秋の山　東都　白居坊

冬枯乃野はまた暮かたし二日月　柳市坊

留守る間掃しては鳴らしき萩茶ふ　双杷尼

木からしや横に吹れて嘻しく鴉　同所　提右坊

拈つくしみくま早走る並さふ　有邑

故郷を出てえんれいさ夏の後　千里

湿雅なや砕けしやうなる枝ふり　不奢観

竹の中一寐ふさく夕かくれ　三河西尾　五周坊

鈎きし啼ひ乃かの跡くも味　也静

消ゆとも潜けるや夕涼　平坂　鯑江

菜乃花やたまへる家の花の庭　北古

常の春波宿る神事のれ　伊勢若者　裏鏡

菊代や菜しる子乃ちの力佛　貴揚

蓮咲く心乃あこれまて清し　紀伊若山　雲止

秋風吹く紙く見て来る月のこゑ　風後

いく水に引かれてく柳かな　肥前佐賀 周的

春雨や立てはたてぬ水の上　左雄

古仕舞もて追へ白して船に　金鵞

枝垂にてる陽炎を宿す柳かな　画山

雨ふれ乃空まてくもるや虻一羽　菊亮

菜種ふり出ける程や稲佐月　同所 柳下園

陽子綱して猫ねぶる柳かな　佳要

梅咲くや折てもれはぬかりなし　乙馬

氷解や去年より跡わかし舟　長崎 李子童

聞うきも又酔てあく鶯居され　喚我

只紙長ふる藁よりや梅の塊　如石

若菜さや駕を捨て歩行手　得之

盆ありて番ゑし𢦏をに歎かれ　里券

水仙や雪掃さしの硯に酔　其朝

女房に登月中掃せに雲ねうに　長門萩 其音

濁して下を誰かわかさうかゝれけり　尼 菊舎

行とても下駄へらさじ檜原哉　周防徳地　仙露

菊さらしつゝ行や冬の雁　宮市　礎洞

蓬や鶴移りし代の跡ら面　石見益田　以杏公

蜂乃巣やあかしく高底にぬる也　有吏

卯の花やあよめてうれしき　里泉

うとかねて寝けり川に一更の音　墨外

須磨に枝かざして涼むや牛車　梅貧

桜から見れしぬ小鬢も見なれつゝも　松有

菜苗や札よ先き手柄の遊ひ　文路

その流れ乃流れて広き柳かな　佳兮

水際の草しく流さうけさ乃宮　和節

笠みなす休むも灯や苔の露　津軽　亥雨

夕立や洗ふ植乃砂流ひ出し　高角　鶏雨

菊綻乃延る出庵かな
雨にぬれつ綻も開きつゝ

読し戸に語ふ人あるて夜の鶯　若狭小濱　自閑

清く浮く暦ふろ三川夕霞　近江國友　青蛙

石ふミし山川の梺家や苔乃宮　加賀金沢　手鳴
岩飛ふや伽藍乃陰の細流也　半白坊
涼しさや稲も隠せぬ水の茂　越後新潟　風悠坊
菊植て我家かけいの分れけれ　沼宮　堤柳
涼しさや猫の手にまで新し人の跡を　中之嶋　柳昌
涼風や水で濯ぐ紙の舟　新津　些兮
夏ぶくれ高人遊ぶ小舟の郭　関　東粲
岩つたふ水や渡舟の坂分の門　上条　程吾

萩咲くや折戸明けの花ひとり　堀之内　徐々
踊り抜ける娘も若やぎ家の家　小石瀬　兎六
菊さかりく後や花咲くきえけり　出羽庄内　文化
名月やきれて咲けとのさの秋　文二
暮ても来ぬ人も待つ初桜　尾花沢　惟中
足軽や菊のくれも乏次十ヶ十　山形　風五
涼しさや解て取る種の鵆　信濃仁科　流古
名月つ夜も飛つく寒しの寄りけり　美濃黒野　風虎坊

秋風やあそくはあらす露の色　（象潟）文莪坊

落葉や消ぬつるか枝うしてやり　卓路

うしろ手や粉雪のせ乃枝かう　（岩手）萬裏

猫の稲なき会点の人のり子あれ　路悠

木ぐ乃兄白ふし中ノ仏来の家ふ　（岐阜）聞吹

夜も佳るれ〳〵の月のる月見ゆ　支山

出来ことつるるえ方名乃子や秋の蔭　交五

風呂の明く万代中待中く破られ　（紫苑里連）古鳴

起くふ先白ひよし岩ふ山　蓼雨

暮よ来ても扇り於さ乃すゝきに　（大垣）一ゝ菴

柴さりの迚まく砧ふ津しに　有止

柳ちるや名残ちつく角の西　（塩田）五青月

於おし依稿のきゃや枯尾花　（北方）嘉柔坊

中お〳〵と風の香り梅麻　（高富）時鳥坊

面ふうる〳〵ゆきりかさま踊に　曽流

慶しこ物すこき野や枯尾花　（西美野）何人

古川うさや来てき一羽気て来る　加納 蒼卯訪

衰ふ月乃影寒くれ小おしかれ　表佐 周路

えらりて色りぬきしか垣の梅　切通 呉雪

山門乃内をちらし秋の宿　左朝

州側ふ稲負ふ牛乃ゝ小春ふ　郡上 宜遊

稲をまくく落寄藁の下りくれ　時兆

来て山や行く鳥む言たる声　芙泉

宗名まき泥絶ぬりし行清水　越前宅馬市布 一啼

行きそれハ形ちからふまま雲乃絲　宍粟朝日 以道

夕霧や鐘ろつく秋の番の寺　布仙

石只でふきりおも寄紙さくしうか　福井武門 紅楓

瀬乃みらきくとまて跳ぬ　和弄

戸練てしあ月まつうふ秋おちふ　里丈

いりふうりも燃え鐘ちそ閉あふ　暮山

菜の花やすまけり神さつ冬てちり　李青

垣乃理絆をかれて涼しこく行　蓬雨

紫陽花や鴨の首洗ふ桜川　町家　二専

なけもなき晴きはこの岩登り那　桐甫

次の浦々姫繰かけとも月夜　周波

清く出て来や四蝶乃光の江に浮き　帰青

神垣や宵に菜稲乃穂ととの　呉子

あるに出川々磯にさし鮭乃小雪　祐阿坊

五月雨や門田にも龍に雲り鐘　同所　英之

夏川らで流る写にて鶴かれ　府中　可今

二三日論あり比出川小雲なし　臥雲

植て行く夕まに名月見れ　五中

海原や帆まかせちるに絹乃雲　同所　芝錦

落雲や稲穂島の子の露けし　粟田部　二耕

又酒しと月まだ暮れてその暮　素桂

残る音の隙ひしつまく汐二つ　芦白

ゆふ立乃隅まれく流や家の丈　菫羽

又ぬうちの花とや信と初さくら　白起

菜陰や春と云鶏乃毛加減　天王 其吁

寐る氣て床へ入る雨の音哉　令羽

石橋乃添紋寸乃浮や冬の月　西留中 習波

雪の夜ハさむうしけ之鶏乃風　淋之

寐てくれ〻鶏さハくなり冬の月　気比 芦周

飛鶏ふる一足かと殿清水　三国日和山 等佐

竹まるに寐ても春風世を深ねの隆　可北

掃よせて鶏乃気色を確める　紫山

此頃ハ里乃ゆ来やむ花乃営　滝谷 化佛

井車乃それ〳〵鶏余寒に　金津武門 虚紅

妙寮ゝや星雲の下借し　和吹

風なぐ鶏ゆく鶏屋の鳥帽子かな　町家 百丈

鳥の葉屋乃水ゆく蒸篭哉　暮紅

ほくもしや雲飯乃音はなひし　二遂坊

春乃日やむ山鶏のうれしかり　九岡 甫立

付の鶏る木下やはくさ草　松岡 志推

菜の花や馬も頼まず渡りけり　孤舟

来くと照る菜も咲し磨の江　流歩

朧気し別れに雁見る川の音　大野　白烏

ほとゝきす瀬にもゆく二声への　喜因

蚊柱や森の覚えて峰の　意改

滴りに花落く夜より水の雫　雨柳

ちるもふる名日暮やまの空　巴井

ちりかゝれは末に立枝まで落ちの雪　五羊

月さ遊くきたむきし木の葉かな　可由

神まつりや一倍高き桜かな　壮川

名月の夜は子規ても飛し鳥移ひ　陶里

立ちこめし家のあかりも出てみる緑の香　塵嶋　野翠

紫陽花や空へ小雨の気ぐらし　蜷水

蝶つ涼しさや奥の院　萩野　梅里

深て行き深の色に雪ちる　照水

先ヶ月の月すさその縁　下唯野　可候

折〱も夕陰くらき香に梅の花　（鶯堂）池月

夕照やなんての香も宿乃菩提ちらり　（井野口）落三

舞うらも手書らしや二日月　（粟寺）落十

心澄む梅や雪風雅の夢　（若槇野）鈴呂

おやすみ梅白ひ又月かすみ　（新保）和今

明雲乃ちらに杭くや娘の風　（勝武門）砂流

角□の不惜さうんくく鶯□□　琴二

礎て嗚し乃□□□梅□れ　一瓢

今もなを手本の採るや君乃行　巴陵

花く嬉にまほまにも尼も旅なれ　宜調

凡ありふ□世乃交代冬こもり　風架

梅か香に後ろ向くなや月朧　有李

飯□し□りり見れ寺乃門　寄梅

突ひしら□鷺さ□立川火燈□　笑計

山里や急ぎてうんめ□むく□□　可樂

行□やきまはゝり□し鳥かつら　嵐顧

寐る花を待かねて來ぬ屋のおとつれ　譲畝

涼風や波よせて来る池乃面　可笑

百千鳥啼くや庭の緑をし露るゝ也　坂左

雛子鳴く程氣の沙汰や下涼口　草遊

紛れ来ぬに鳴く声も山隅くらし　千巵

春嵐乃松や夜るよ鳴くちより　草孤

殊久しくそうして咲く藤乃柳かれ　緑水

かきなりの分れ別へや山のうち　眹扇

名ちりや座しさかれて御前酒　蛙敬

葉桜や志川さの涼ふ橋の色　汝門 敬止

白雨や縁りよき花木乃声　鳥橋

娘より焚くや見事な名の夕乃ふ　露恵

涼しさや吹よふ竹と鶏もふ　三志

涼しさ見れ黒しや夜来また　觀裏

宮雛も花ふ笹よ松ふやまさね　町家 南鳥

山家さやや数多ある乃夏も祝て　兔涼

吞子ちるや一とにに静な日和　柳左

凡山んゆゑはまだ絶ぬ柳かな　因之

枝たれさ垂し枝之姉しの雨　具仙

花雲乃夕暮へきよ浪の上に　渭流

藻菊揺く蓑麻しや秋の暮　兒十二

雨ふれとも出茶屋の香や桜かれ　烏旭

雍し世ゝ夜霰和や又浦雲　柳浦

出女乃手の下くゞる螢ゝの非　可瑞

茶の席ひに庵あり捨ひや雲の暮　雨林

色かひも逢まころれ田螺かり　芝青

咲ちれは中に柳乃緑哉　具鳥

宿操ま夕くれわむ行くさ哉　三行

借きしよみ来くる雲をみ涌かな　正軽

霰むれや高実こして滝の音　南濱

宵和高くや隣の園まてむ小笠垣　知鮮

表張紙出く花つくや春しくれ　等佐

餘のあきをとりて流しく桜かれ　柳蛍

破も月も花なれハ余所の火燵かな　窓雨

若草や暖簾きよさ乃ちすう　蕗遊

菊し乃影付くちりや田の香　圖南

借り切川さ庵やつむ檜榾の色　器水

秋乃夫のたそふえてなり五月雨　菩路

寒月や花すさ夜し浦の蟆　在京 芦船

寒かなる蓮まよふ雲かれ　盲人 芦吹

榾焼てつゝむや蛙をとり　尼 自清

ゆふ立や蓮今は川乃清き滴り　仝 自支

照りまず入日雨山し雪乃京　以貫

秋やて陽秋風や蝶口和　帰花仙

梅子塚手向

菊編勝山ハ俳諧相手としてもきの
ちかしらなりしかか
桃桃乃靈塚ハ今事依因で祀ひ
ら拂し生ある古石の如くかく梅子乃墓

俳諧をこのみし佐吉乃弐叢にて數寄に
とも今く社中の信ずるところなし
ちなみて楼上乃珠と
孤雲庵俳風雅を心とせるにより
蕉翁乃百回忌を編集乃会頭に
して源すい梓乃ふ乃ほへありしとそうらふ次
安者云へ居とらんしかへはこれの序く
ろさし花を添つて賀歌あらしを
今や楽境乃頭能あ披け
孝養ともいふなりしものしかふらんむかしへ八
千坂の德とりてむ備ふこの庵乃名を
もっていちひろ森ふると

祝ふ翁も賤佐吉のひく楼前の擁
護あるべしとなむゐのきつき一章を
佳くとりてふらありさらば
梅ちるも芽纏ん
坂乃佐吉ふとと
白寿坊
九拜

享和二戌暦孟秋

皇都
野田治兵衛拜彫